

僕が誘拐したのはJ（女子） S（サキュバス）

「わかってますか？ おにーさん？ これって、誘拐ですよお？」

「う、うるさい。わかってる……！」

築三十年のボロアパート。八畳一間の自宅。ベッドとテーブルが置かれている他は雑誌や洗濯物に占領された、およそ掃除が行き届いているとは言い難い猥雑な寝ぐら。

僕は今日、そこに一人のJ Sを無理矢理連れ込んだ。

「へえ？ わかってるんですね。じゃあ犯罪者さんの自覚、あるんですね？」

鍵とチェーンをかけた扉を背にして、ランドセルを背負ったままの少女を背後から羽交い締めになっている。この部屋はアパートの二階であるため、彼女はどうやっても逃げ出すことはできない。

だというのに、少女は全く焦りも恐怖も感じさせない態度をとり続けていた。

彼女の名前は佐々倉美羽。近所の小学校に通う、四年生。

名前と学年は名札や登校中の会話から見聞きした。アパートの前の道が通学路であったため、美羽ちゃんは毎日二度、僕の家

前を通るのだ。

彼女を初めて見た時、天使が現れたのだと本気で思った。

短く揃えた艶やかな黒髪は日の光を浴びてエンジェルリングを作り、眠たげな眼には長い睫毛。黒い瞳は夜空のように透き通っていて、肌は一切の汚れを知らない本物の純白。そして何よりも、大人顔負けの爆乳。

大きなおっぱいを黄色や水色のパステルカラーが基調の女兒服に窮屈そうにしまい、ピンクのスカートを履いて、身体よりも大きそうな赤いランドセルを背負う彼女に僕は一目惚れしてしまったのだ。

その天使が今、僕の家に住居僕腕に抱かれている。そう思うと興奮が隠せなかった。

毎日、朝と夕に美羽ちゃんの姿を窓から見ること。それが僕の人生で唯一の楽しみであり、幸福だったのだ。

見ているだけで良かった。登下校する美羽ちゃんの姿を見て、時々友達と話す声を聞く。生きるだけなら充分な糧になった。でも、今朝は違った。

登校する美羽ちゃんを普段通りに窓から見つめていたら、彼女は僕の方を見上げ、微笑みかけてきたのだ。

見られてしまった。知られてしまった。僕の存在が、彼女の世界に認められてしまった。

窓一枚隔てた向こう側、決して手が届く場所ではなく、向こうからこちらを知覚することは絶対にはずの外側。画面の向こうにのみ存在する二次元のキャラクターが僕を知覚することがないように、美羽ちゃんも窓の向こうから僕のことを見つめ返すこ

となんて絶対にはないと思っていた。

けれど、違ったのだ。僕と美羽ちゃんは同じ世界に居た。手を伸ばせば触れられる、同じ世界に。

だから、手を伸ばした。そして、こうして触れている。絶対に人の手に触れられることはないと思っていた、天使に。

しかし、興奮している僕とは対照的に美羽ちゃんは冷静で落ち着き払っている。状況を理解していない訳でも、恐怖で固まってしまっている訳でもなく。

「ここで思い切り声を上げてみましようか？ この家の壁、薄そうですね？」

ハッと気付き、慌てて彼女の口を左手で塞ぐ。身体の拘束自体は緩んだものの、どうせ子どもの力では振り解けないだろう。

「はあ……はあ……」

美羽ちゃんのやわらかい唇の感触とすべすべの肌の滑らかさを手のひらで感じ、むくむくと股間が反応し始める。心臓は高鳴り、全身が火照る。手のひらにじっとりと汗をかいているのは、美羽ちゃんのぬくい子ども体温や吐息のせいだけではない。

抱きかかえるように拘束しているせいで密着しているから、美羽ちゃんの華奢な身体の弱々しさとやわらかさ、子ども特有の熱いほどの体温を全身で感じる。それは、女性と手を繋いだ経験すらない僕の心を夢中にするには十分すぎるほどの刺激だった。

「はあ……はあ……うえっ……」

緊張と興奮のせいで胃がひっくり返って心臓を吐き出しそうになる。嗚咽のせいで涙が出てきた。

(ここからどうすれば良いんだ……)

胸の内から湧き上がった今まで覚えたことのない衝動に突き動かされて行動したはいいものの、この後のことを全く考えていなかったのだ。美羽ちゃんに触れること、がゴールだったとさえ言える。

「んっ……」

「……っ!」

身をよじった美羽ちゃんの小さなお尻が、僕の股間に触れる。ムニっとしたやわらかな感触に反応して、ペニスがギチギチに硬くなる。

「はあっ……はあっ……」

その感触をもっと味わいたくて、自分から膨らんだ股間を美羽ちゃんのスカート越しのお尻に擦り付けたくなる。しかし、微妙にお尻の方が低い位置にあるせいで上手く擦り付けられず、へこへここと不格好に腰を振ってしまう。

「ちゅう……れろお……」

「ううわっ!？」

突如、美羽ちゃんの口を塞いでいた左手のひらに生温かくて滑りのある感触を覚え、驚いて離してしまう。

「くすっ。ちょっと舐められただけで驚きすぎじゃないですか?」

「なっ、なっ、舐め!？」

「そうですよ? おにーさんの手のひらにちゅうってキスをして、ベロでれろおっと舐めてあげたんです」

こともなげに言い放つ美羽ちゃんの言葉の意味をすっかり咀嚼してから、一気に顔が熱くなる。美羽ちゃんに触れただけでなく、手のひらに口付けまでしてもらえるだなんて……!

ある種の感動を覚えながら、つやつやと光る美羽ちゃんの唾液が付着した左手のひらを見つめていると、「間接キス、したいんですか? 変態ですね」という言葉が飛んできたので名残惜しいながらも諦める。

「それで? 私を捕まえてどうするつもりだったんですか? まさかとは思いますが、こうして抱きつくためにわざわざ誘拐した訳じゃないですよねえ?」

「そ、それはもちろん……」

考えていない。とにかく美羽ちゃんに触れたかっただけなのだから当たり前だ。

「はあ……。段取り悪すぎませんか? 仕方ありませんね……」

軽やかな動作で、しゅるりと僕の拘束から抜け出した美羽ちゃんが、こちらへ振り返る。

「私を犯したかっただんですよね? か弱い女の子を押し倒して、ひん剥いて、セックスがしたかっただんですよね? 良いですよ、させてあげます」

呆気なく拘束から抜け出したことにも、まだJ Sの美羽ちゃんの口からそんな言葉が出てきたことも驚いたが、しかし何より僕が驚いたのは彼女の瞳の色だった。

真っ直ぐに僕を見上げている美羽ちゃんの瞳が、神秘的な紫色に変わっているのだ。いつもの、見慣れている透き通った黒ではなく。

そして美羽ちゃんはさらに、僕を驚かせる言葉を口にする。

「私、サキュバスなんです♡」

僕が誘拐してしまったのはJ SはJ Sでも、J（女子）S（サキュバス）だったのである。

☆一章

「ええっ……サ、サキユバス!?!」

あまりの驚きに尻餅をついてしまった僕には構わず、美羽ちゃんは淡々と言葉を続ける。

「はい。この通り」

ひよこ、と美羽ちゃんの背後から紫色の皮膜を持つ蝙蝠の羽が。お尻からは黒い蛇のような尻尾が生える。よく見れば耳もエルフ耳のように長く、尖りを持ったものに変化している。

「えっ、えっ、えっ、いや、そんなこと急に言われても……」

「この格好も着替えちゃいますね。胸が苦しくなるので」

そう言っつて美羽ちゃんがランドセルを床に置いてから前髪を押さえている白いヘアピンを撫でると、一瞬にして服装まで変わった。

光沢を帯びた、黒のマイクロビキニ。純白の肌を際立たせる扇情的な格好に、僕はドキドキしてしまう。

服装だけじゃない。美羽ちゃんの華奢な子どもらしい身体の中で一部分だけ、突出して僕を惑わせる箇所がある。

胸だ。一二〇センチほどしかなさそうな身長にはおよそ似つかわしくない、大きな胸。美羽ちゃんの頭よりも、さっきまで背負っていたランドセルよりも大きな胸。爆乳と呼ぶのがふさわしい胸が、マイクロビキニの紐をパツパツと引き伸ばしている。

「どうですか？ 驚いて声も出ないんですか？ それとも、私の体に見惚れちゃいました？」

無言のまま、ごくくと唾を嚥下することで頷きの代わりにする。

マイクロビキニの紐が千切れそうになるほどパツパツに実った豊乳はとてもやわらかそうで、くつきりと見える谷間は深々としている。小さなカップによって乳先は隠れているが、乳房全体はほとんど丸出しになっているせいで少し揺らしただけで溢れてしまふのではないだろうか、と期待してしまう。

「やっぱりおっぱいに見惚れちゃってるんですね。小さな女の子の大きなおっぱいに夢中になっちゃう、ダメなおにーさん」

吸い込まれそうなほど美しい紫色の瞳を備えた眼をジト目にした美羽ちゃんが、両手で左右からおっぱいを支える。小さな手や細くて短い腕のせいで、おっぱいの大きさが強調されてしまう。

「ぽよんぽよん。ゆっさゆっさ。ほらほら、おにーさんの大好きな爆乳、揺らしてあげますよ」

「あっ♡ あっ♡ おっぱい……♡」

乳房を下から持った美羽ちゃんが、手の上でぽよんぽよんと乳房を弾ませる。

弾むごとに大きな乳房はたわみ、彼女が手のひらで受け止めると簡単に潰れてしまう様子に、おっぱいのやわらかさがこれでもかと伝わってくる。

直線だった長い谷間はむにゅむにゅと歪み、純白の幼乳肌は波打つ。その様子を見てみると、うっとりとしておっぱいに釘付け

になつてしまふ。

「おにーさん、ロリコンで犯罪者な上におっぱい大好きなんです。終わってません？ まあ私にとっては都合良いですけど」

「うっ……」

凶星を突かれてしまい、なにも返す言葉がない。

もちろん、胸が全く膨らんでいないつるぺたの女の子も、成長の兆しが見られる膨らみ掛けも大好きだ。しかし、美兔ちゃんのような背も低くて幼い女の子のおっぱいが大きいと、それはそれでとても興奮してしまふ。

「それで、どうします？ 怖気付いたって言うなら構いませんけど……」

そこで言葉を区切り、おっぱいを弾ませるのをやめた美羽ちゃんが一步詰め寄ってくる。目の前に迫った爆乳はそれだけでたゆん、と揺れ、甘い香りを放つて僕を虜にする。

「誘拐したくなっちゃうほど大好きになっちゃった私のこと、ここで帰せますか？」

腰を曲げ、ずいっと顔を近付けてきた美羽ちゃんが神秘的な紫の瞳で目を覗き込んでくる。吸い込まれそうな彼女の瞳……いや、僕の心は本当に彼女の瞳に吸い込まれ、捕らえられてしまっている。

「か、帰せないです……♡」

「ふふっ。本当に私にメロメロになっちゃったんですね？ おめめにハート、浮かんじゃってますよ？」

華奢な指で美羽ちゃんが僕の目の前にわざとらしくハートマークを描く。ピンク色の光沢を放つ小さな爪に見惚れ、力が抜けてしまう。

「さ、おにーさん」

屈んでいるせいで重力に導かれ、一際大きく見えるおっぱいを美羽ちゃんが持ち上げる。万有引力のせいで下向きになったおっぱいは大きさはもちろん、谷間の長さも先ほどまでとは比べ物にならないほど強調されていた。更にはたぶん、と重たそうな様子が乳房のポリウムをこれでもかと伝えてきて、僕は目が離せない。

「おっぱいに飛び込んできて良いんですよ？ おにーさんが好きで好きで仕方ない、私のおっぱいに♡」

くす、と妖しく笑った美羽ちゃんの誘惑に抗えず、僕はふらふらと身を乗り出して純白に乳肌の爆乳に自分から埋もれようとする。

しかし、そこで一つの不安がよぎる。

「ん？ どうしました？」

僕の動きが止まったことを訝しんだ美羽ちゃんが不思議そうに尋ねてくる。言おうかどうか一瞬悩んだが、意を決して口を開く。

「美羽ちゃんはサキュバスのようだけど……えっと、男性経験というか、その……」

しどろもどろになりながら紡いだ言葉を、美羽ちゃんは呆れたような鼻息で遮る。

「処女かどうか気になってるんですね。良いことを教えてあげます。私は処女ですし、恋愛経験ありません」

「それじゃ……」

不安を拭かれて一気に気分が明るくなる。しかし、美羽ちゃんの言葉はそこで終わらなかった。

「何故かと言えば、わざわざセックスなんかしなくても男の人を搾り尽くすことなんて簡単にできるからです。そして私は、人間の男性をそもそも恋愛対象にしていません。餌、です。ライオンがシマウマに恋をしますか？」

瞳の輝きをいっそう強めた美羽ちゃんが口角をあげ、小さな牙を見せつけてくる。

その笑みはまるで、獲物を見つけた捕食者のようで……。

「やっと気が付きました？ おにーさんは餌なんです。私の罠にかかった哀れな獲物」

美羽ちゃんが小さくてピンク色の舌で唇を舐める。僕は完全に自分の置かれた立場を理解させられてしまう。

「おにーさんが私を捕まえたんじゃないやしません。私がおにーさんを捕まえたんです♡」

「い、いやっ、誘拐しちゃったのは僕の方で……」

「私、わかるんですよ。おにーさんみたいなロリコンさんの気配。だから今朝、学校へ行く時に目を合わせてチャームをかけちゃったんです。それで、自分から私を家に招くように仕向けたんです。その方が楽ですから」

その言葉を聞いて納得する。普段から行動力のない自分がどうして今日に限って誘拐なんてことをしてしまっただけの衝動

に駆られたのか。

(そういうことだったのか……)

「だから、罪悪感とかは忘れてくれて良いですよ？ だって……」

ニヤリ、と笑った美羽ちゃんの口の端に、キラリと牙が光る。

「その方が、美味しく食べてあげられますから♡」

舌舐めずりで唾液を纏い、艶やかな光沢を帯びた桃色の唇に美羽ちゃんが人差し指と中指をくつつける。

何をするんだろう……と身構えていると、彼女はそのまま「ちゅっ♡」と投げキッスをする。直後、ふわ、とパステルピンクのハートが宙に浮いた。

「触れただけでも心を魅了する唇と、男の人を発情させちゃう唾液で作った特製のサクユバスキッスです。一発でメロメロにしちゃいますよ？」

目の前でふわふわと浮いているハートに、美羽ちゃんが「ふうー」と吐息を吹きかける。甘い風を受けたハートは真っ直ぐ僕の顔に向かってくる。

「心、奪っちゃいますね♡」

放たれた投げキッスは僕の口に触れて弾け、やわらかくてみずみずしい感触を与えてくる。それはまるで、本当に美羽ちゃんに

口づけをされたような多幸感で……。

「あう……♡ 美羽ちゃ、美羽ちゃん……♡」

頭の中がホワホワして美羽ちゃんのことしか考えられなくなる。さっきまでよりも強く美羽ちゃんを求めて、彼女に全てを差し出してしまいたくなる。

「くすっ。たった一回の投げキッスでここまで深く魅了されちゃう人、初めて見ました。ちょっと弱すぎじゃありません？」

「美羽ちゃんっ♡ 美羽ちゃんっ♡ 美羽ちゃん大好きっ♡」

たった一回投げキッスを受けただけで僕は完全に彼女に心を奪われ、ペニス下着の中で痛いほど勃起してしまっている。こんなに強く性的興奮を覚えたのは初めてのことだった。

「はいはい、わかっていますよ。ほら、おにーさんの大好きなおっぱいです。バストサイズ一〇〇センチのMカップおっぱいにお顔から飛び込んで来て良いですよ」

体軀に対して大きすぎるおっぱいを短い腕に乗せて持ち上げた美羽ちゃんが、ゆっくりと見せつけるように谷間を開く。ほわんと香る甘い匂いの正体は谷間に閉じ込められていた芳香だろうか。

「ひゃ、ひやくセンチ……♡」

美羽ちゃんの呼吸に合わせて目の前で上下に揺れる爆乳の大きさを数字で表され、頭がおかしくなりそうなほど興奮する。小さ

な女の子なのに、普段はランドセルを背負った歳の子なのに、大人すら圧倒するMカップのおっぱいを持っている。それを考えれば考えるほど理性が焼き切れそうになる。

しかも、美羽ちゃんはさらに僕を興奮させる言葉を続けたのだ。

「私、おっぱいと身長之差が二十三センチしかないんですね」

瞬間、頭の中でブツン、と音がした。理性の紐が完全に焼き切れたのだ、と気付いた時には既に美羽ちゃんの一〇〇センチMカップ爆乳に顔の下半分を埋めていた。

「美羽ちゃんっ♡ 美羽ちゃんのおっぱい♡ あまあま一〇〇センチおっぱいやわらかいっ♡」

自分から美羽ちゃんの幼爆乳に飛び込み、谷間に目から下を全て挟み込む。美羽ちゃんが自分で開いてくれたとはいえ、大きすぎるおっぱいはみっちり乳房同士が触れ合っていて、胸板までは顔が全く届かない。

しかしその結果、たぶたぶむちむちの幼乳肉に顔を覆われる形になり、甘い奔流が鼻から入り込んでくる。

「お、おっぱいっ♡ あま♡ いい匂いっ♡」

「うわ……完全におっぱいバカになっちゃってますね。ま、最初から耐えられるとは思ってませんでしたけど」

頭上から投げかけられる美羽ちゃんの冷やかな声も気に留めず、僕はひたすら幼爆乳を揉みしだき、谷間の中で頬擦りをする。触れている部分全てが幸せに包み込まれてとろけてしまいそうなおっぱいのふわふわ感に、すっかり溺れてしまう。

「良いんですか？ おにーさん。私の胸の谷間、おっぱいフェロモンがたっぷり籠っちゃってるんですよ？」

聴き慣れない言葉に戸惑いながらも、僕は彼女の幼爆乳をひたすら手と顔で味わい続ける。

「あま〜い体臭やおっぱい特有のミルク香が谷間の中に閉じ込められて混ざり合った、女の子の身体の中で一番エッチな匂いがするもの、それがおっぱいフェロモンです。ひと嗅ぎするだけで幸せになっちゃうのに、そんなに吸い込んだらフェロモン中毒になっちゃうですよ？」

話を聞いていたはずなのに、脳みそを多幸感で埋め尽くすおっぱいフェロモンを嗅ぐのをやめられない。ぷるぷるもちもちの幼乳肌にぴったりと鼻口をくっつけ、鼻から深く息を吸い込んでしまう。

「おっぱい♡ おっぱい……♡ 美羽ちゃんのおっぱい……♡」

手のひらから溢れてしまうほど大きな乳房を揉みしだきながら、谷間の中で幼乳肌とおっぱいフェロモンに溺れる。鼻からも口からも入り込んでくるおっぱいフェロモンのあまりに芳醇な香りは、舌の上に甘みを感じるほどだった。呼吸するものの全てが美羽ちゃんのおっぱいの香りで、脳みそがピンク色に染め上げられていくのを感じる。

「おにーさん、本当にクソザコですね。ここまで弱くて情けない人を餌にするのは初めてですよ」

ジト目で見つめてくる美羽ちゃんが、はあ……と呆れてため息を吐き出す。甘い香りの吐息が頬をかすめ、鼻腔をくすぐった。

「あうううっ♡ 美羽ちゃ、美羽ちゃん好きいっ♡」

「ええ……？ 私の吐息だけでまた魅了されちゃったんですか？ 私、普通にため息を吐いただけなんですけど……」

呆れたような口ぶりで美羽ちゃんが冷たい視線を向けてくるが、それさえ今の僕にとっては興奮材料になってしまう。

「まあ、抵抗されるよりずっと良いですけど。いっそのこと本当におっぱい中毒にしてあげた方が大人しくなって良さそうですね」

「おっぱい♡ おっぱい♡ 美羽ちゃんのおっぱい好き♡ もっともっとおっぱい欲しい♡」

「はいはい……。お望み通り、このままおっぱい中毒にしてあげますね。おっぱいが気持ち良いことと、私のことが大好きなこと、それ以外は何も分からないおバカさんになっちゃってください」

美羽ちゃんはそう言うと、自分の腕にすら収まり切らないほど大きなおっぱいをぎゅうつと抱いて、谷間に包み込まれている僕の頭ごと揉みくちやにする。

僅かに谷間から出ていた両目すら持ち上げられた乳肉に呑み込まれてしまい、視界さえ完全におっぱいに覆われる。

「ばふばふ♡ ばふばふ♡ 情けなくとろけちゃったお顔、完全におっぱいに埋まって見えなくなっちゃいましたね♡ 私のあま

あまおっぱいフェロモンたくさん嗅いで、美味しいご飯になってくださいね♡」

「なりゅっ♡ みうちゃんのご飯になりゅっ♡」

美羽ちゃんのおっぱいの中で甘ったるいフェロモンを胸いっぱい吸い込むと、どんどん脳が溶けていくような気がする。うわ言のように言葉を口をするたびに口からもフェロモンが流れ込んでくるから、すぐに何も考えられなくなってしまふ。

(うう……で、でも、ダメだ、こんなの……)

僅かに残った理性で呼吸を止めようと試みる。せめて、ほんの少しでもフェロモンの吸引量を抑えることができたなら……！

「んんん？ 我慢しないでいいんですよ？ 私のおっぱいフェロモンたっぷり吸い込んで、私が大好きなだけのおにーさんになっちゃってください」

もにゅ、もにゅ、もにゅ、とおっぱいごと僕の頭を揉み込んでくる美羽ちゃん。

頭を包み込んでいる幼爆乳はやわらかくてすべすべで、顔に乳肌が擦れるたびに思考がとろけてしまう。鼻に触ればほわん、とおっぱいフェロモンを香らせてくるし、口に当たれば乳肌に吸い付いておっぱいに甘えたくなくなってしまふ、まさに魔性のおっぱいだった。

「どうですか？ 私のおっぱい牢獄。こうやっておっぱいの中に閉じこめて顔や頭をもみくちゃにしてあげると、どんな男の人もおっぱい大好きなおバカさんになっちゃうんです。おにーさんみたいな、ロリコンな上に大きなおっぱいが大好きな人には天国みたいじゃないですか？ はい、ばふばふ♡」

話している間も一切緩めずに手を動かし続けている美羽ちゃんのおっぱいの中、僕は甘いおっぱいフェロモンの香りとやわらかい爆乳に酔いしれてしまふ。

「時々、ロリコンマゾの中にはおっぱいは小さくないと嫌だって人もいますけど、こうやってばふばふしてあげたらすぐに大

きなおっぱいが大好きになっちゃうんですよ。わかります？ 性的嗜好だって、私のようなサキユバスならいくらでも上書きできちゃうんです。それなのに元から大きなおっぱいが好きなんて……絶対耐えられませんね♡」

(はう……♡ みうちゃんのおっぱい♡ あまくて、きもちよくて……♡)

ふわふわなおっぱいの中に包まれ、幼乳肌に頬を吸い付かれてもちもちの感触をたっぷりと味わわれる。そうやってとろけた脳みそに甘くて芳醇なおっぱいフェロモンが浸透し、多幸感で頭の中がいっぱいになる。

(あっ♡ あっ♡ おっぱい……♡)

頭の中ががキュンキュンと疼き、まるで脳細胞で射精しているような感覚を覚える。美羽ちゃんのおっぱいによって与えられる多幸感で、脳内麻薬がひっきりなしに噴出しているのだろう。

「そろそろ私のおっぱいフェロモンに染まってきた頃ですかね？ 念入りにもう少しばふばふしてあげたら、おっぱいから出してあげますね。その時にはおにーさんはもう、私の虜です♡ ばふばふ♡ こねこね♡」

触れているもの全てが美羽ちゃんの幼爆乳で、呼吸するもの全てが美羽ちゃんのおっぱいフェロモンの、極楽としか思えない谷間の中。すっかり理性はドロドロに溶かし尽くされ、我慢はしようとすら思えない。

(みうちゃん好き……♡ このまま一生みうちゃんのおっぱいに住む……♡)

蕩けきった思考とは対照的に、ペニスは尋常ではないほど硬くなり、痛いほど勃起していた。

心臓の高鳴りもすっかり止まず、完全に全身が美羽ちゃんにメロメロになってしまっているのがわかる。窓の外の彼女を眺めていた頃よりも、ずっとずっと美羽ちゃんに恋をしてしまっている。

(みうちゃん♡ みうちゃん♡ 好き♡ 好き好き♡ 大好き♡)

自分が今、その大好きな美羽ちゃんのおっぱいに抱かれていると改めて思うと、興奮が更に高まった。大好きで大好きで、ずっと眺めることしかできなかった美羽ちゃんのおっぱいに包まれて、美羽ちゃんの香りをたっぷり嗅がせてもらっている。そう自覚すると一気に脳細胞が溶けてしまう。

(しあわせ……♡)

多幸感がオーバードーズして思考が焼き切れ、ビクンビクンと体が震えだす。触れてもないペニスまで震え出し、腰が勝手に跳ね始める。

「すっかり私のおっぱいに騎けられちゃったみたいですね。素直で無抵抗なロリコンマゾのおにーさん、好きですよ？」

「好きですよ？」その言葉は多幸感と快感が表面張力を張っていた僕の脳内に、さらに幸福感を与えてきた。

(あう……♡ だめえ……♡)

直後、勃起しきったペニスの亀頭がさらに膨らみ、肉竿の根元がとくんととくんとポンプのように震え、熱くてドロドロの白濁液が尿道を駆け上がっていく。

どびゅっ♡ どびゅどびゅっ♡ どびゅっ♡♡♡

「あっ♡ あ……♡」

排尿感に似た心地良い解放感と、昇天しそうになるほどの快感。下着の中に広がる熱さに、自分が射精したことをはっきりと自覚させられる。

「……はあ？ まさかとは思いますが、私にばふばふされてただけで射精しちゃったんですか？」

僕の腰がガクガクと跳ね、ビクンビクンと身体が震えているのに気が付いた美羽ちゃんが、冷たい声で訪ねてくる。

「うっ……♡」

膝立ちの姿勢で美羽ちゃんのおっぱいに顔を埋めていた僕の股間に美羽ちゃんが足を伸ばし、そのまま踏みつけてくる。射精直後のペニスを踏まれたのと、下着の中に出された精液が当たるぬるぬるの感触に声が漏れた。

「うわっ……本当に射精しているじゃないですか。しかも結構な量……」

おっぱいを僕の顔から離れた美羽ちゃんが目視でも僕の股間を確認する。もしかしたら、精液が内側から滲んでズボンにみっともないシミを作っているかもしれない。そう思うほど大量に勢い良く射精してしまっていた。

「あうう……♡ だって、美羽ちゃんのおっぱい気持ち良すぎて……♡」

『あうう……♡』じゃないんですよ。おにーさん、自分が私の餌だってわかってます？ 射精させるつもりじゃなかったのにこんなに漏らして……食べ損なったじゃないですか」

呆れを通り越して失望や侮蔑さえ紫色の瞳に浮かべている美羽ちゃんが、今日最も深いため息を吐く。その上、ぷい、と僕から目を背けてしまった。

(悪いことしちゃったかな……)

射精の余韻も引き、僕は強い罪悪感を覚える。大好きな女の子を、美羽ちゃんをがっかりさせたり悲しませたりしてしまったことは、僕にとっても不本意だった。

「ご、ごめんね……」

「はあ……謝られても……」

そこで僕の方を見た美羽ちゃんが、呆れの中に慈しみを感じる、穏やかな笑みを浮かべた。

「もう……なんて顔してるんですか。年下の女の子相手にそんな、申し訳なさそうな顔……餌のくせに……そんな顔されたら怒れないじゃないですか」

ちよん、と指先で僕の眉毛に触った美羽ちゃんが、そのままぞっていく。くすぐったいけど、優しい指使いだった。

「眉毛が落ちそうなくらい下がっちゃってますね……さっきまで情けなくとろとろになってたくせに。私に怒られたのがそんなに怖かったんですか？」

「そ、そうじゃなくて……ちゃんと我慢できなくて、上手に餌になれなかったのが申し訳なくて……」
「ふうん？」

美羽ちゃんに一方的に気持ち良くして貰ってしまった上に、彼女の本意に添えなかったことを思うと声のトーンも気持ちと一緒に沈んでしまう。

「そうですか、そうですか。どうやら私は大当たりを引いたみたいですね」

しかし、当の美羽ちゃんは僕の言葉を聞いてむしろ上機嫌そうだった。

「ちよっと、気分が良いです。この気分の良さに免じて、優しく、美味しく食べてあげますね♡」

そう言うと、美羽ちゃんが僕の額に優しく「ちゅ♡」とキスをしてくれた。それだけで心臓が跳ね上がって顔が熱くなってしまう。

「特別にリクエストを聞いてあげますよ。私にどこで搾精してもらいたいですか？ 性器以外ならどこでも使わせてあげます」

「えっ、り、リクエスト……？」

「はい。好きなどころを選んで良いですよ。あっ、まずちゃんと教えてあげた方が選びやすいですよね」

美羽ちゃんは上機嫌な声でそう言うてから、先ほどまで僕の顔を包み込んでいた豊満なおっぱいを持ち上げて見せつけてくる。

「お顔を包まれるだけでお漏らししちゃうほどやわらかくてふわっふわのおっぱいでパイブリされたいですか？　きっと包まれただけで射精しちゃいますよ？　それでも私が満足するまでおっぱいズリズリするのやめてあげませんから、ふわふわおっぱいおむつに何度も何度も情けないお漏らしさせてあげます。どれだけ出しても全部私のおっぱいの谷間で受け止めてあげますよ♡」

美羽ちゃん言葉とおっぱいにうっとりしていると、今度は短くて細い足を持ち上げ、目の前に裸足裏を見せつけてくる。すべてとやわらかそうな、思わずキスしてしまいたくなってしまおう真っ白で綺麗な足の裏。

「十二センチしかない足でふみふみされて、年下の女の子に見下されながら搾り取られたいですか？　おちんちんよりも小さなぶにぶにの足の裏にふみふみ……すりすり……されて気持ち良くなっちゃって、射精する時に強く踏みつけられて搾り取られたり、私がギュッギュッって踏みつけてあげるたびにピュッピュッって射精するの、きつと気持ちいいですよ？」

無意識のうちに顔を寄せて踏まれに行っていた僕の目の前で足を下げた美羽ちゃんが、今度は目の前に顔を近付けて口腔を指で広げて見せつけてくる。

「私の小さくて熱いお口でおちんちん啜えられたいですか？　狭いからふわふわぬるぬるの内頬が先っぽを包み込んだまま裏筋やくびれをろろろおろろって舐め回してあげられますよ？　喉の奥まで飲み込まれて、ぎゅうぎゅうって締め付けられてドロドロのせーし、私のちっちゃな胃袋に注ぎたくないですか？」

言葉を発するたびに頬にかかる美羽ちゃんの吐息に酔いしれていると、彼女が白くて細い、綺麗な指を見せつけてきた。切り揃えられている薄桃色の爪さえ可愛らしい。

「たくさんキスしてあげながらおちんちんを手でシコシコされるのはどうですか？ 唇をぴったり重ね合って、ペロを絡ませ合いながらおちんちんシコシコ♡ 唇とペロを吸われて脳みそがとろとろになっちゃってるのにひたすらおててでシコシコされておバカさんになってみませんか？」

(え、選べない……♡)

どれもこれも魅力的な提案すぎて、とてもではないが一つに絞ることなんてできない……。それに、美羽ちゃんの身体はどの部位も芸術品のように美しく、それでいて快楽をふんだんに与えてくれることが予想できる。甲乙つけ難いなんてレベルの迷いではなかった。

「で？ どうします？ おにーさんが一番好きなところを素直に選んでくれていいんですよ？」

にこ、と笑う美羽ちゃんに、僕はいつそう申し訳なくなる。

「ち、ちょっと選べないかな……」

「優柔不断」

「ごめん……」

一言でバツサリと斬り捨ててくる美羽ちゃんの前に、僕はしょげて項垂れる。

その様子があまりにも情けなかったせいかな、彼女は溜息を吐いてから言葉が続けた。

「ま、仕方ないですか。おにーさん童貞さんみたいですし。それじゃあ、おにーさんの大好きなおっぱいでパイズリしてあげます

ね♡ 感謝してくださいね？ パイズリなんて普通は絶対してあげないんですけど、おにーさんだけ特別です♡ たくさん気持ち

よくして美味しく食べてあげたいですから♡」

「はい、お洋服脱いでベッドにゴロンしてください」

言われた通りに美羽ちゃんの目の前で全裸になり、ベッドに寝そべる。本当は美羽ちゃんの前で服を脱ぐのは恥ずかしかったが、有無を言わさぬ美羽ちゃんのジト目に射すくめられて急いで脱いだのだ。

「素直に言うこと聞けて偉いですね。はい、今度はお尻持ち上げてください。膝入れてあげますから、そこにお尻を乗せてくださいね」

美羽ちゃんの膝の上に座り、下半身を投げ出す。脚と脚の間にちょこん、と美羽ちゃんの小さな身体は収まってしまふ。

しかしその体勢は自分の股間を完全に美羽ちゃんに委ねてしまっている無防備なものであり、屹立して震えているペニスの直上には豊満な幼爆乳が迫っている。美羽ちゃんが手で抑えてくれないければ、おっぱいは僕の股間に落ちてくるだろう。

「すんすん……。おにーさんの精液、いい匂いがしますね。美味しそうな匂いです」

陰毛やペニスに付着していた先ほど漏らした精液の匂いを嗅いだ美羽ちゃんがそんなことを言い、僕は恥ずかしさで顔が赤くなる。一方でペニスはさらにググ、と大きくなる。

「一回射精しちゃってもちゃんと大きくなってますね。やっぱり上等な餌みたいです。普段はどれくらい射精しますか？」

さらっと恥ずかしいことを聞いてくる美羽ちゃん。サキユバスだからその辺りは気にしていないのだろうし、食材にどれくらい可食部があるか気にする程度なのだろう。

「い、一日七回……」

恥ずかしい気持ちを抑えて正直に答えると、美羽ちゃんは感心したように頷いた。

「そんなにですか。サクキュバスに搾精されると、一回の射精でいたいオナニー三回分くらいの精液を一度に出しちゃうんですよ。さっき一回射精しちゃった分を引いても、おにーさんだけで二回分の食事になりますね」

紫色の瞳を期待に輝かせる美羽ちゃん。その様子はまさしく捕食者と言える。

「あ、でも限界まで搾れば三回分くらいは食べられますかね？ とりあえず搾ってみましょうか」

美羽ちゃんが抱え切れないほど大きなおっぱいを支えている手を離して、股間に落とそうとしてくる。

しかし、僕はもう一つ気になることがあった。

「そ、その……あんまり大きくないと思うけど……良いの……？」

女性はみんな大きなサイズのペニスが好きだろうし、サクキュバスである美羽ちゃんは特にそうだろう。対して、僕のペニスは平均程度の大きさしかない。果たして美羽ちゃんの餌としてどうなのか、不安になってしまう。

だが、美羽ちゃんは呆れ果てたように大きなため息を吐いた。

「おにーさんは飲み物を買う時にストローのサイズで選びますか？ 喉が乾いている時、中身が同じコーラだとしたらストローのサイズと容量、どっちを重視しますか？」

意図がよくわからない質問に、少し悩んでから答える。

「な、内容量かな……。喉が乾いているならたくさん飲みたいし……」

「そうですね？ 私も同じです。おちんちんのサイズなんて、搾精が難しいほど小さかったりしなければどうでも良いですよ。

大事なのは精液の質と量です」

なるほど……と素直に納得してしまう。

「そういう意味ではそうですね……。おにーさんはバケツコーラと言ったところででしょうか？ 飲み干すのが楽しみです♡」

れろり、と真っ赤なベロで舌舐めずりをした美羽ちゃんが、いよいよおっぱいを下ろしてくる。

美羽ちゃんはおっぱいを持ち上げていた手を少しずつ離していき、おっぱいがゆっくりと下りてくる。

「好きナだけ、好きな時に射精してくださいね♡ お腹ペコペコなので、早く出してくれると助かります♡」

そしてとうとう、美羽ちゃんはおっぱいを持ち上げて支えていた手を完全に離れた。

「うわっ……♡」

どたぶん♡ と股間に落ちてきたおっぱい。吸い込まれるように、幼爆乳の中にペニスが収まってしまふ。

「あっ、あっ♡ おっぱい、すごい……♡」

股間にずっしりと感じる、美羽ちゃんのおっぱいの重さ。のしかかってくる重量感が、美羽ちゃんのおっぱいがしっかり脂肪の

詰まった爆乳であることをこれでもかと伝えてくれる。

「気に入ってくれましたかー？ このまま射精しちゃって平気ですよ。肌にかかった精液は全部吸収できるので、我慢せずにおっぱいにたくさん射精しちゃってください」

谷間にペニスを挟み、腰までおっぱいを乗せてきただけで動かしもせず、美羽ちゃんはやにやと笑いながら僕に言う。実際、一切動かしてもらっていないというのにペニスはヒクヒクと震えてしまっていた。

「うう……♡ 美羽ちゃんのおっぱい……♡」

もちもちふわふわの柔乳肉は挟み込んでいるだけのペニスに吸い付き、そのやわらかさを伝えてくる。

きめ細やかですべすべの、美羽ちゃんの幼乳肌。触れているだけで気持ち良くなってしまう魅惑の肌触り。もしもパイズリするにしても、これほどやわらかくて滑りが良く、心地良い感触の幼乳肌ならば潤滑油などの類は余計な物でしかないだろう。

「ぶ♡ おちんちん挟んで乗せているだけなのに、本当におっぱいに負けそうになっちゃってますね♡」

おっぱいを乗せているだけ……美羽ちゃんから見た状況は確かにその通りだが、僕の方は全く「だけ」なんかではない。たわわに実っているながらキュッと締まったおっぱいの谷間は狭く、みっちりと僕のペニスを包んでいる。

股間にのしかかっている爆乳はペニスの根元と腿の付け根の隙間にまで潜り込んで、敏感な部分をくすぐってきていた。ぷるぷるでふわっふわの、おっぱいの中で一番やわらかい下乳肉の感触にうっとりしてしまふ。

そんな状況で我慢なんてできるはずもなく、僕のペニスは情けなく我慢汁を垂れ流してしまう。

「くすっ♡ 美味しそうな匂い、してきましたね。自分からへこ腰振っておっぱいに負けちゃっていいですよ？」

「あう♡ あっ、ありがとうございますっ♡」

美羽ちゃんに言われた通り、僕は自分から腰を跳ねさせて、おっぱいの中でペニスを突き上げる。

「あああっ♡ 美羽ちゃんのおっぱい気持ちいいよっ♡」

「うわ、餌が自分から喜んで食べられようとしてるところ、初めて見ました。年下の女の子に命令されて本当に腰振っちゃうんですね？ 情けなさすぎますよ♡」

呆れた口調ながらも楽しそうな様子の美羽ちゃんがおっぱいに体重をかけて、いつそう弾力とやわらかさを味わわせてくる。

「さらにい……えいっ♡ ぱふぱふ♡ ぱふぱふ♡ おっぱいを押し付けられながらおちんちんにぱふぱふされちゃうと、すぐに気持ち良くなっちゃいますよね？ 私、詳しいんです」

「これっ♡ これだいきい♡」

ふわふわむにむにのおっぱいで優しく乳圧をかけられているところに、突き上げるように腰を動かす。自分で動かしているのか、快感で跳ねてしまっているのか判別がつかなくなってしまふほど、美羽ちゃんのおっぱいは僕を気持ち良くしてくれる。

「おっぱいで包んであげてちよっとぱふぱふしているだけなのに気持ち良すぎておかしくなっちゃう姿を見るの、大好きなんです」

よね。おにーさん、たくさん食べられるだけじゃくて目でも楽しませてくれるなんて本当に良い餌ですよ？」

必死にペニスを突き上げているところに美羽ちゃんの褒め言葉を貰い、嬉しくなって腰を動かすペースが早くなる。

どれだけ腰を持ち上げても亀頭はおっぱいからはみ出ることがなく、常に幼乳肌のすべすべの感触ともちもちふわふわの柔乳の心地良さを伝えられる。

その上、美羽ちゃんがおっぱいに体重を預けて下腹部に押し付けているせいで、腰を動かすたびに自分からおっぱいに埋まりにいくことになり、それが結果として僕の性感をどこまでも高めてくれる。

「あうう……♡ しあわせ……♡」

生殖器は常に美羽ちゃんのおっぱいに挟まれたまま快感を伝えられ、下腹部は美羽ちゃんのおっぱいの重量感と下乳の軟乳でとろけるほどの心地良さを覚える。

「へえ？ 自分が捕食されているっていうのに幸せなんですか？ いいですよ、このままイっちゃって。おにーさんの精液、美味しく食べてあげます」

僕の絶頂を促すように、美羽ちゃんはぼよぼよ、ぱふぱふ、とおっぱいをペニスに押し付けてくる。精液が弾力に押し上げられ、尿道の中をせり上がっていくのを感じる。

「ううっ♡ イっちゃう♡ 射精しちゃう♡」

「はい。イってください。私、お腹がペコペコなんです。早く食べられてください」

このままでは美羽ちゃんのおっぱいに射精してしまう。サキュバスに精液を食べられるとは、餌にされるとは、いったいどうい
うことなのか。未知の経験に対する微かな不安を感じる。

しかし、それでも全く腰を止めることはできず、興奮と本能に駆られて美羽ちゃんのおっぱいの中でひたすらペニスを上下に動
かしてしまふ。

包み込んでくれるおっぱいのやわらかさに溺れていると左右から押し付けられる乳房の弾力で射精を促され、もちもちの幼
乳肌はペニスに吸い付いて摩擦を強くする。僕はもう不安すら忘れて、快感を貪るべく腰を振り続ける。

そして、限界が訪れた。

「あああっ♡ 射精る♡ 射精ますっ♡」

「ぶ♡ 歳下の女の子に敬語になっちゃうなんて、情けないおにーさんですね。はい、美味しく食べてあげますから、私のおっぱ
いにぜひんぶ射精しちゃってください」

むにゅううつと乳圧を強めた美羽ちゃんのおっぱいにペニスを丸ごと呑み込まれ、僕は完全に絶頂に達する。

びゅくびゅくびゅくっ♡ どびゅっどびゅっ♡ どくどくどくっ♡♡♡